HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』：研究の現状と課題
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 71, 111-142
Issue Date	2018-03-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/68787
Type	bulletin (article)
File Information	MC71_05Terada.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《論　文》

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』
―研究の現状と課題―

寺　田　龍　男

1　はじめに

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(Heinrich von München: Weltchronik) は、1370年から80年頃ドイツ語圏南部で成立したと推定される作品である[1]。現在までに、14・15世紀に書かれた19の完本写本と８つの断片写本が知られている[2]。旧約聖書の天地創造から新約聖書を経て、もっとも長いものは皇帝フリードリヒ２世（1254年没）に至るまでの歴史について語る。先行するさまざまな文献に直接依拠している箇所、すなわち写字生が典拠の文言をほとんど処理せずにそのまま引用した箇所が非常に多い作品である。そのため写本の記述とその出典の関係がわかりやすい場合がある一方で、生の素材を引き寄せたままの所もあることから、研究者の間ではしばしば「寄せ集め」(Kompilation) と定義される。

歴代ローマ皇帝の名前や即位年と事績に加えてその時代の教皇の名前とエピソードも挙げている点などから、ひとまず歴史書とみなすことは可能である。しかし内容的には明らかな虚構や証明不可能な記述も少なくない。そのため歴史学者のヘルバート・グルントマンは、この作品のように（ラテン語でなく）世俗言語で書かれた年代記は、一般に歴史学者にとっては史料としての価値が低すぎ、文学研究者にとってもまた文芸的価値が低すぎるとみなす。だがグルントマンが続けて述べるように、当時の人々はこれらの年代記を非常に尊重しており、彼らの歴史像もそれらから紡いでいたのである（Grundmann, S. 11)[3]。

そうであればこの『世界年代記』は、その人たちの意識を知るためには格好の素材となるはずである。ところがこの作品は長い間、事実上研究者の関心の対象外だった。その最大の理由は、そもそも全体像を見渡せる校訂版が存在しないことにある。それはなぜか。第１に現存する写本（完本）がいずれも莫大な分量（およそ3万から10万行）をもつ。第２に構成内容が写本により異なりかつ多岐にわたる。そして第3にそれらの中から「最良」の写本を認定するのが困難なのである。天地創造からフリードリヒ2世に至るまでの歴史の中では数多くのエピソードが語られるが、それらの長さは写本により大きく異なる。もっとも詳しいものを選び出して合算すると、総計で20万行を超えるという試算もある（Wolf, S. 475)。特定の写本を校訂す

る計画が立てられたことは少なくとも３度あるが、いずれも刊行には至っていない[4]。校訂版が存在しなければ、写本を直接手に取ることが可能な人以外、すなわちほとんどすべての研究者が何もできないのは当然である。

さらに、校訂版の欠如に匹敵する大きな問題がある。各写本が依拠した作品も多種多様であるばかりか､それらもまた多くが莫大な長さだからである。1150年頃に成立した『皇帝年代記』（Kaiserchronik）は古態のＡ系写本の校訂版で17283行にのぼる。1230年頃に古態本が成立した『ザクセン世界年代記』（Sächsische Weltchronik）も大部の散文である。1250年頃成立し、その後の年代記の構成に大きな影響を与えたルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』（Rudolf von Ems: Weltchronik）は校訂版で36338行を有する。14世紀半ばに成立し､ハインリヒ･フォン･ミュンヘンの『世界年代記』の土台となったと考えられる『増補クリストヘレ年代記』（Erweiterte Christherre-Chronik）は57000行を超える[5]。また13世紀末の『殉教者受難物語』（Passional）は、筆者の試算では第１書・第２書および第３書の合計が10万行余りにのぼり[6]、1284年以降の成立と推定されるヤンス・フォン・ヴィーンの『世界年代記』（Jans von Wien: Weltchronik）の校訂版も28958行を数える。しかも、これらの作品自体もしばしば写本ごとに本文が異なる。すなわち、ハインリヒの『世界年代記』の各写本と、その出典となった各作品の写本の関係が、この上なく複雑なのである。それに加えて『黄金伝説』（Legenda aurea）など大部のラテン語作品も出典として重要な位置を占める他、世俗文芸からもよく引用されており、シュトリッカーの『カール大帝』（Stricker: Karl der Große、12058行）やコンラート・フォン・ヴュルツブルクの『トロイ戦争』（Konrad von Würzburg: Trojanerkrieg、49861行）など、考慮しなければならない作品は少なくない。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の研究に卓越した業績を上げたパウル・ギヒテルやギーゼラ・コルンルンプフのような個人はむしろ例外で、クルト・ゲルトナーのグループとヴュルツブルク大を中心とする２つの大型プロジェクトが研究を推進したのは当然だった。彼らの成果は目覚ましく、従来の通説を大きく変える知見が次々と出されて今日に至る。とはいえ残された課題もなお多い。だがプロジェクトが終了した今、個人による研究が困難を伴うのであれば、次代を担う若手の研究者が食指を動かされるテーマとはとてもいえないだろう。

しかしこうした厳しい条件にもかかわらず、ハインリヒの『世界年代記』の研究は今ひとつの転機を迎えている。日本における軍記物語研究の用語を借りれば、「流動する本文」への関心が高まりつつあるからである[7]。それだけではない。ゲルトナーを中心とするグループが編纂した『世界年代記』の新しい校訂版[8]は、これまでの常識にひとつの疑問を突きつけた。写本の校訂に関しては現在のドイツ文献学で揺るぎないように見える考え方、すなわち「特定の写本の字句を忠実に再現する原則」（Leithandschriftenprinzip）では対処しきれない書承形式の存在を広く知らしめ、多くの研究者がこれを解決すべき問題とみなす状況を現出させたからである。この状況に私たちはどう対応すべきかを考えることが、小稿の出発点である。

文献学の研究は実証性がまず要求されるのであり、そのための作業を地道に積み重ねなければならないことは論を俟たない。ことさらいうまでもなく、この課題に取り組むためには筆者の能力をはるかに超える力が必要である。しかし書記伝承の実態は、ドイツ語圏はもとより日本も含めた多くの文化圏で今なお不明な点が多く、解明すべき課題が山積している。したがって、たとえ対象の社会的背景は異なっていても、研究成果を比較することで相互にさまざまな示唆が得られる可能性がある。そこで小稿では、まずハインリヒの『世界年代記』に関する現在までの研究で明らかになったことと今後の課題を論ずる。そして筆者なりの考えと展望を述べることとしたい。

2 「世界年代記」の伝統におけるハインリヒ・フォン・ミュンヘンとその作品

ハインリヒ･フォン･ミュンヘンという人物の存在を証明する史料は知られていないものの、ハインリヒは長く『世界年代記』の作者とみなされてきた。だがこの名はもっとも古い形態を残すヴォルフェンビュッテル写本Wo1/H1（Cod. Guelf. 1.5.2 Aug.2°）[9]には出ない。伝承写本はその後α系とβ系に分かれるが、名前はβ系の一部にしか見られない[10]。しかもβ系はα系よりも成立が遅いことから、現在ではこのハインリヒを「オリジナル」の作者ではなく、書記伝承のいずれかの時点における編纂者と解する見方が有力である。しかし作品のオリジナルの成立が1370年から80年頃だったのであれば､すでにドローテア･クラインが想定しているように、Wo1/H1本の祖本の（改）作者とβ系（次章でふれる、1394年と99年の成立が確かな２写本がある）の祖本の（改）作者が同一人物だった可能性はある（Klein（1998a), S. 64f.)。年代的にはそれどころか、オリジナルの作者（あるいはそのグループ）が同じ作業圏内にいたことも考えられよう。いずれにしてもハインリヒの『世界年代記』は、成立した直後から約30年の間に現存するほとんどの写本が書かれ、15世紀後半に最後の書写が行われた作品なのである。

しかしこの作品を考察するためには、まず「世界年代記」というジャンルで先行する諸作品とその性質を押さえておく必要がある。すでに述べたように、それらがしばしばハインリヒの『世界年代記』の典拠となっているからである。西洋の数ある史書の中でも、年期ごとの出来事を記す編年誌とは異なり、（世界）年代記は旧訳聖書の天地創造から始めて執筆者の時代に至る歴史を描写するのが通例である。地上の支配者の事績を聖書の権威とともに語り始めることで、一連の歴史が由緒正しいものであることを伝えようとしたのであろう。文字文化が普及していなかった前近代にあっては「書かれたもの」の権威が大きく、それだけにどの文化圏でも（支配者の）歴史を執筆して自己の支配を正当化するという現象がみられる。それは支配のピラミッドの頂点に立つ皇帝や王だけでなく、その権威に依存しながら民を支配し、地域を統治し、裁判権を行使する貴族たちにとっても重要なことだった。はたしてドイツ語による最初の年代記である『皇帝年代記』は数多くの写本が書かれ、またたく間に各地に広まってゆく。

だがその意識は同じドイツ語で書かれた最後の韻文年代記であるハインリヒ・フォン・ミュンヘンの作品まで貫徹しているであろうか。この点を確認するため、その『世界年代記』に先行してドイツ語で書かれた（世界）年代記諸作品を俯瞰する[11]。

1 『皇帝年代記』（1150年頃）

レーゲンスブルクの氏名不詳の聖職者によって書かれた本作品は、ドイツ語による初の韻文年代記であり、建国の伝説に続けてカエサルからコンラート３世（在位1138–52年）までを語る。散文ではなく、脚韻を踏む韻文で書かれたのは、当時の宮廷社会の習慣に従ったのであろう。ラテン語の年代記の伝統とは異なり、ローマ帝国の皇帝の列伝であり、天地創造に始まる一般的なパターンには依らない。しかしイエズスなどへの言及はある。出典については詳細な研究がなされており、多くの典拠が明らかにされているが、口頭伝承とその真偽を意識した記述もある[12]。あとに続く世界年代記や世俗文学の諸作品に大きな影響を与えている。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』でも数多くの対応箇所が確認されているが、その中心は最古の系統ではなく後出本である。そこでは古態本とは異なり、冒頭で旧約聖書（ノア・アブラハム・ダビデ）や新約聖書（マリア・ピラト・キリストの生誕）に関する短い記述が補われているものもある（Der keiser und der kunige buoch［…］, S. 189f.）。年代記の記述が各写本で異なるのは、この例でも明らかなように、ハインリヒの作品に限らず広く見られる現象である。

2 『ザクセン世界年代記』（1230年頃から1275年頃の間に成立）

作者不詳の本作品はドイツ語の散文による初の世界年代記である。散文というスタイルはラテン語による世界年代記の伝統の踏襲といえる。主要な典拠はフルートルフ・フォン・ミヒェルスベルク（Frutolf von Michelsberg）によるラテン語の『世界年代記』にエッケハルト・フォン・アウラ（Ekkehard von Aura）が手を加えたものである。『ザクセン世界年代記』はその冒頭で旧約聖書（天地創造、バビロン捕囚、ペルシャ、ギリシャ）と新約聖書関連のごく短い記述はあるものの、基本的にはローマ帝国の皇帝と教皇の歴史を語る。この作品もさまざまな系統があり、記述が1225年で終わるＡ系、1235年で終わるＢ系の他、もっとも浩瀚なＣ系では1260年までの記述がある。Ｃ系の増補は主として『皇帝年代記』による。しかし同じＣ系でも違いがあり、韻文で書かれた『皇帝年代記』の記述を散文の中にそのまま取り入れている写本がある一方、韻文を散文に直して取り入れた写本も存在する。後者の方が『皇帝年代記』からの引用が少ないのは、韻文を散文に改変し、文脈に合わせる時間と労力が大きかったからかもしれない。

3 ルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』（1250年頃）

フォラールベルク地方の従士（Ministeriale）階級の出身と称する（ただし証明する文書は

発見されていない）ルードルフ・フォン・エムスは、長編の物語をいくつも残した人物である[13]。その『世界年代記』は、未完に終わったものの、歴史を救済史ととらえるキリスト教の伝統に則って構成されている。エウセビオス、ヒエロニムスらが発展させた時代区分観はアウグスティヌスにより確立され、聖書に基づく世界史（Weltgeschichte）すなわち普遍史（Universalgeschichte）を6つの時代に区分した。後のベーダからイシドールス、オットー・フォン・フライジングらによる史書はこの考え方で歴史を記述する（Grundmann, S. 18–24; 岡崎, 29–77頁）。分けられたのは天地創造（アダム）・ノア・アブラハム・モーセ・ダビデ・キリストの誕生以降（最後の審判まで）の6時代で、ルードルフの年代記はこのスキーマを初めてドイツ語で示したのである。本作品は次のように始まる。

Richter got, herre ubir alle kraft,	審判者である神よ、一切の力を越えた主よ、
Vogt himilschir herschaft,	天の支配の主（ぬし）よ
Ob allin kreften swebit din kraft:	あらゆる力のはるか上に汝の力はある。
Des lobit dich ellu herschaft.	故に支配の力はすべて汝を讃える。
Orthaber allir wisheit,	あらゆる知恵の源である主よ、
Lob und ere si dir geseit!	賛辞と名誉が汝に捧げられよ！
Frider, bevride mit wisheit	平和を守る主よ、その知恵をもって
den der dir lob und ere seit,	汝に賛辞と名誉を捧げる者を守られよ、
got herre, wan din einis wort	なぜなら主なる神よ、汝の無比の言葉は
ist urhab, kraft, sloz unde ort	一切の始源の根源であり、力であり、
allir anegenge! （v. 1–11）	終焉であり、目標であるから！[14]

本文最初の7行の頭文字を縦に読むとRVODOLFとなり、現代語のRudolf（ルードルフ）に対応する。作品の冒頭は作者がしばしば創作の理念や動機を述べるところであり、そこに自分の名前や依頼者の名をこうして織り込む「折句」（Akrostichon）には高度の素養と技術を必要とするため、この部分は作者の技量の高さを示す証拠としてよく知られている。冒頭1行目の表現により、この作品は『審判者、主なる神の年代記』（Richter got herre-Chronik）とも呼ばれる（Walliczek, Sp. 340）。次に挙げる『増補クリストヘレ年代記』の作者はおそらくこの文言に影響を受けたと思われる。出典は、聖書以外はもっぱらラテン語の文献である。ルードルフの年代記は第5時代の途中で中断しているため、新約聖書以降の時代には言及がないが、この6時代構想はハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』で実現することになる、というのが最近までの定説だった（Maßmann, S. 353–356; Gichtel, S. 25f.; Gärtner（1985）, S. 117）。

4 『増補クリストヘレ年代記』（14世紀半ば）

逸名筆者の手になる本年代記は「増補」という形容辞が示すように、もともと天地創造から

士師記の途中までを語る『クリストヘレ年代記』（13世紀後半成立）という作品があり、これにさまざまな記事を付加して14世紀初めに書かれたのが本作品だと考えられていた[15]。内容は天地創造から列王記の途中までである。かつては『クリストヘレ年代記』がハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の典拠と見られていたため、ハインリヒの年代記の成立年代も14世紀前半と想定されていた。しかしその後の研究により、『増補クリストヘレ年代記』は『クリストヘレ年代記』を単に増補拡大しただけではなく性質の異なる作品であり、成立年代も14世紀半ばに下ること、そしてハインリヒの年代記の典拠としても、『増補クリストヘレ年代記』がはるかに重要であることが判明した。そのためハインリヒの年代記の成立時期も、遅らせて1370–80年頃と推定されるようになったのである（Klein（1998a), S. 63)。『増補クリストヘレ年代記』は、先行する諸年代記や歴史物語、および散文作品を幾重にも寄せ集めて書かれている。

なおこの作品の名称について一言述べておきたい。『クリストヘレ年代記』（および『増補クリストヘレ年代記』）の冒頭は、すでに述べたようにルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』の記述から想を得ている。

CRist h(er)re keiser ub(er) alle craft	主なるキリストよ、一切の力を越えた皇帝よ
Voit himelischer h(er)scaft	天の支配の主（ぬし）よ
Got kunic ub(er) allir e(n)gel h(er)	神よ、すべての天使たちの上に立つ王よ

(v. 1–3)[16]

第１行の冒頭表現により本作品は『クリストヘレ年代記』（Christherre-Chronik）（および『増補クリストヘレ年代記』(Erweiterte Christherre-Chronik)）と呼ばれる。CRistはクリスト（ドイツ語のキリスト）でわかる。だが次のh(er)reは「主なるキリスト」の「主」ではないだろうか。皇帝を意味する３番目の語keiserと結びついて「皇帝陛下」を意味するのではあるまい。先行研究ですでに『クリストヘレ年代記』という表現が用いられているので小稿はひとまずその表現に従うが[17]、「クリストヘレ」は固有名ではないので、これが何を意味するかは想像しにくいだろう。内容から判断して、訳語は『主キリストの年代記』でもよいと考える。

5　ヤンス・フォン・ヴィーンの『世界年代記』（1284年以降）

この年代記の作者は、かつてヤンス・エニケル（Jans Enikel）またはヤンゼン・エニケル（Jansen Enikel）と呼ばれていた。しかしこのEnikelは現代語のEnkel（孫）であり、「ヤンスの孫」と作者が自称したという理解が広まったことから、現在ではヤンス・フォン・ヴィーンと表記される[18]。史料で同定することはできないが、作品内の自己記述によればウィーンに住んでいた人物である。『世界年代記』では以下のように記されている。

Der ditz getiht gemachet hât,	この韻文作品を作った者は
der sitzt ze Wienn in der stat	ウィーンの町に家を持って
mit hûs und ist Johans genant.	住み、ヨハンスという名である。

an der korôniken er ez vant.　　年代記とするため彼はこれを創作した。
der Jansen enikel sô hiez er.（v. 83–87）[19]　　ヤンスの孫と彼は呼ばれる。

ヤンスの年代記も天地創造から始め、アダムとその子孫、ノアと洪水、モーセ、ダビデ、ソロモンを経てトロイ戦争、アレクサンダー大王へと語り進める。ここまでが全体のほぼ3分の1であり、残りがローマおよびドイツの皇帝の列伝に充てられている。ローマの皇帝伝は『皇帝年代記』に従うが、コンスタンチン帝西暦375年のあとはいきなりカール大帝に話が飛び、駆け足で皇帝フリードリヒ2世まで語られる。末尾にはバーベンベルク家の系譜が挿入されている。

ルードルフ・フォン・エムスが提示した６つの時代区分には当てはまらない。ヤンスの年代記はイエズスにごく短く言及するだけで、新約聖書に対応する部分がほとんどないからである。それ以外の点でもルードルフとヤンスの作品は違いが大きい。ルードルフ・フォン・エムスは聖職者的素養が前面に出ており、論旨も一貫している。いわば聖書の記述に忠実に従ったといえる。これに対してヤンス・フォン・ヴィーンの記述は、同じ素材を扱っても「物語」的な性格が強い。またある物語を語る途中で新たな物語を始めるなど、全体の構成が有機的とはいえず、また筋立ての緊密性も低い。教皇の名を挙げるだけで何も語らない部分があるかと思えば、皇帝について逸話を披露するという態度も見られる。上に引用した文でvinden（= erfinden）という動詞に「創作する」という訳語を選んだのは、たとえ既知の素材であってもこれを独自に語り直す志向性が認められるからである。

6　ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』

ハインリヒの年代記もすでに述べたように、天地創造から（もっとも長い場合）皇帝フリードリヒ２世の治世までを語り、先行する年代記諸作品のすべてを引用している。その他にも利用された作品は多数に上る。ゲルトナーらのきわめて実証的な校訂版では、底本となった写本の筆者はどこでどの作品の何行目から何行目に依拠したかが、詳細かつ丁寧に示されている。それらを見ると、各写本の制作者には猛烈な素材収集欲とでも呼ぶべき意識があったように思われる。ただこれもすでに述べたように、写本により構成が大きく異なるため、すべての写本について典拠と本文の関係が研究され尽くしてはいない。今後の大きな課題である。

作品の構成に関する従来の通説は、ルードルフ・フォン・エムスが示した世界史を６時代に区分するスキーマがハインリヒの年代記で実現したと考えていた。たしかにそのような写本はある。しかしアンドレーア・シュピールベルガーの調査によると、完本写本のうち６時代に分けられるのはいずれも後出の５点であり、古態本を含めてその他は７時代が７点、旧約聖書の４時代のみと５時代のみで完結したものがそれぞれ１点、旧約と新約を合わせて4時代のものが１点、同じく合わせて５時代のものが１点、新約のみのもの１点で、残りは判定不能が１点である[20]。世界史（普遍史）を６時代に分ける考え方が受け継がれているのは事実だが、人々の意識を強く拘束する性質の教えではなかったのであろう。

ほとんどの写本で旧約聖書の記述が新訳以降より圧倒的に長い。新約聖書のイエズスにまつわる部分ではカルトジオ会修道士フィリップの『マリアの生涯』（Bruder Philipps Marienleben、14世紀初頭）がしばしば引用される。新約聖書の部分が『マリアの生涯』だけの写本もある。ローマ皇帝や教皇、そしてカール以降の皇帝の列伝はしばしば省略され、また短く切りつめられる傾向がある。皇帝の列伝をフリードリヒ２世まで語る写本は、もっとも長い写本（ともに約10万行を有する「ルンケルシュタイン写本」M3/H9と「ゴータ写本」Go1/H15）を含めわずかに３点しかない。この事実は写本制作の依頼者の関心の反映であろうか。もしそうであれば、年代記をはじめとする史書は支配者の歴史を正当化するために必要だったという考え方からは乖離するといわざるを得ない。写本の「終わり方」はさまざまだが、カール大帝に関する記述で終えるものが多いことを考えると、写本制作の依頼者には自分の支配の正当化という目的意識が希薄だったのだろう。次章でとりあげるフィントラー家は、いわば財力で貴族の位を獲得した人々だった。そうした人々には、書かれた内容よりも分厚い豪華本を所有するという事実の方が重要だったと考えられる。

先の「素材収集欲」について補足すると、ハインリヒの年代記はしばしばいくつもの世俗文芸の作品を内包している。シュトリッカーの『カール大帝』は多くの写本で引用される。中には古態写本Wo1/H1のように作品のほぼ全体を包含するものもある。いくつかの写本ではヴィレハルム三部作（『アラーベル』（Arabel）・『ヴィレハルム』（Willehalm）・『レンネヴァルト』（Rennewart））からの引用がある。これらを初めとして、小規模な引用だけの作品は多数あると想像されるが、包括的な研究成果は発表されていない。これも今後の課題である。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の研究が困難な理由はいくつもあるとすでに述べたが、他作品にはない具体的なデータも残されている。２つの写本が同じ人物によって書かれ、それぞれの依頼者が伯父と甥の関係にあり、しかもその一族に関する史料が多数存在するからである。以下ではそれらの写本と周辺の世界を明らかにしたい。

3　ハインツ・ゼントリンガーによる2つの写本

1　写本の特徴と成立史

ドイツのミュンヘンでよく知られる「ゼントリング門」（Sendlinger Tor）の名称は、裕福な市民ゼントリンガー（Sendlinger）家に由来する。小稿で考察する『世界年代記』には、同家に出自をもつハインツ・ゼントリンガー（Heinz Sentlinger（生没年不明）、その姓には-d-ではなく-t-を用いる）という人物（Kornrumpf（1992）; Wetzel（2002）, S. 406–408; Ott（2010））が書いた写本が２点残されており、いずれも『世界年代記』のみが収録されている。その２点から具体的な考察を始めよう。

１つ目は現在ミュンヘンのバイエルン州立図書館が所蔵している写本M3/H9（Cgm 7330）

で、ハインツ・ゼントリンガーが1394年６月13日に南チロル（今日イタリア領）のボーツェン（Bozen：イタリア語でボルツァーノBolzano）北方にあるルンケルシュタイン（Runkelstein）城で書き終えたという記述がある。「ルンケルシュタイン写本」とも呼ばれる所以である。まず作品の本文末尾に書かれた該当部分を引用する。（本文はSpielberger, S. 149による。）

（…）Auch hat ditz	（…）またこの書を
Puoch geschriben vnd volpracht	書きかつ完成させたのは
Haintz Sentlinger von Muenichen	ミュンヘン出身のハインツ・ゼントリンガー
vnd ein tail gedichtet. Vnd ist	であり、一部は創作した。そして
Gar vol pracht do man zalt von	完成した時、その年次を数えると
christes gepurd tausent iar	キリストの生誕から一千と
drew hundert iar vnd in dem	三百と
vier vnd newntzigstem Jar	九十四年目であった。
An der Etsch auf dem Runckel	エッチュ河畔のルンケルシュタイン（城）で、
stain pei meinem herren Niclas	フィントラー家のわが主君
Dem vintler. Jn dem moned	ニクラス様の許で（書いた）。月は
iunuius an dem dreizehendem	六月で十三日に。
Tag do waz der tag S. Antonij	これはパドヴァの聴罪司祭
confer[21] de Padua.[22]	聖アントニウスの日であった。

文中のエッチュ（Etsch）川とは、今日イタリア領のアディジェ（Adige）川のことである。また聖アントニウスは実在のフランシスコ会士（1195年－1231年６月13日）で、パドヴァ近郊で死去したことからパドヴァの守護聖人とされ、その命日が祝日となった。ちなみにルンケルシュタインは、イタリア語ではロンコロ（Roncolo）である。

この写本は合計306葉の羊皮紙に約10万行が書かれており、『世界年代記』の写本としてはゴータ研究図書館架蔵本（「ゴータ写本」Go1/H15）と並んでもっとも分量が多い。縦横とも長い（縦45,3cm、横33cm）この写本は各葉とも３列組で記述がなされている[23]。挿絵は２点で、写本の冒頭第１葉で旧約聖書にまつわる記述の前に１点（モーセやヨシュアなどの人物像）と215葉で新約聖書関連記事が始まる前に１点（福音書の著者や教父などの像）が添えられている。ハインリヒの『世界年代記』では挿絵が数百にのぼる写本が多数あるため（Spielberger, S. 118–180; 寺田（2016), 20–21頁）[24]、数の上ではたしかに少ない。しかし当時すでに普及していた植物繊維の紙ではなく、高価な羊皮紙に書かれた豪華本である。書写の依頼主でルンケルシュタイン城の所有者でもあるニクラウス・フィントラー（Niklaus Vintler[25]）は不動産取引やワインの流通で大きな利益を得ており、この写本を作らせるための資力を十分備えていた。1385年にはすでに弟のフランツ（Franz）とともにルンケルシュタイン城を購入し、その後改装している。この城では、建物の一部で内装として描かれた英雄叙事詩やアルトゥス王物語、

トリスタン物語を素材とするフレスコ画がよく知られている。城を手に入れたのはむろん政治的軍事的要因が第一だろうが、持てる財力を目に見える形で誇示するねらいもあっただろう。1393年、ニクラウス・フィントラーは貴族に列せられた。その翌年『世界年代記』の写本を完成させたのも、財力と威信を誇示する目的があったと思われる[26]。

フィントラー家は元来ボーツェンの市民だったが、商業や関所の管理者として次第に勢力を増していった（Weck, S. 96–98; Wetzel（2000）; Haug, S. 10）。13世紀末にはボーツェンの２つの街区の裁判権を獲得する。そしてニクラウスの時代になり、同家は飛躍的な発展を遂げる。1413年に死去するまで、ニクラウスは幾多の政争に巻き込まれながらも、南チロルではもっとも有力な貴族の一人だった。後述するグリース地区の裁判権を取得した。また1404年７月８日にはインスブルックで、抒情詩人として知られるオスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン（Oswald von Wolkenstein: 1376年頃–1445年）が関与した私的係争を責任者として調停している（Die Lebenszeugnisse, S. 72–76）。しかし当時は、個人の才覚で一挙に出世することもできれば、逆にたちまち衰退することもありうる時代だった。はたしてニクラウスの死後間もなく、弟のフランツはルンケルシュタイン城の所有権を手放している。

２つ目は、ヴォルフェンビュッテルのアウグスト公図書館が所有する写本Wo2/H12（Cod. Guelf. 1.16. Aug.2°）[27]である。こちらは縦38,7cm、横28,5cmの紙（植物繊維紙）266葉に書かれており、記述は２列組である。行数は約51000で、ルンケルシュタイン本のほぼ半分である。挿絵は施されていない。写本の成立事情に関しては、ハインツ・ゼントリンガーが最終葉で以下のように述べる。（本文はSpielberger, S. 158による。）

Ditz puoch ist geschriben an dem luog	この本はルーエクで、フィントラー
pei Leuepolden dem vintler	家のレオポルトの許で書かれた。
Der die weil zollner do waz vnd ist	彼はこの間関所の主だった。
vol praht in dem moneid	（この本が）完成したのは
Februarius an sand Dorotheen tag	二月で聖ドロテアの日、
Do man zalt von gotes purd	年は神の生誕から数えて
Dreiuzehen hundert vnd	千三百と
naeiun vnd neiunzik iar. Haintz Sentlinger. 1399	九十九年である。ハインツ・ゼントリンガー　1399。

ルーエク（現代のドイツ語でLueg）はオーストリアのチロル州南端のグリースという町の一部をなす集落である。近隣にイタリアとの国境ブレンナー峠（Brenner：イタリア語でブレンネロ峠Brennero）があり、ボーツェンにも近い。レオポルト・フィントラー（Leopold Vintler）は先のニクラウス・フィントラーの甥で、1392年から同地の関所を管轄していた。ここは南北の交通や通商の要衝だったため、税収はきわめて大きかった[28]。レオポルトもそれなりの財力を有しており、それでハインツ・ゼントリンガーに依頼したのだろう。この人物は

フィントラー家に雇われていたと推定される。家の文書を管理する人物が文芸作品の書写に従事する例が少なくなかったことは（Schneider, S. 41）、この仮説を支える根拠の一つである。なお聖ドロテアとは、311年２月６日に殉教したカエサリアのドロテアのことで、その命日にハインツ・ゼントリンガーが執筆を終えたと記している。したがってゼントリンガーは1399年２月６日に作業を終了したことがわかる。

ルンケルシュタイン写本と比べて分量と紙質では劣るものの、この第２の写本にも大きな費用がかかったことは間違いない。注目すべきはむしろ、伯父ニクラウスが制作させてからわずか５年後、ニクラウス（1413年没）の存命中に甥が新たな写本を作成させたことである。その動機を説明する記録は残されていないので推測するしかないが、多額の資力を費やしてすでに目の前にあるものと同じ作品を新たに書かせた背景には、尋常ならざる事情があったのであろう。推測に推測を重ねる行為は慎まなければならないが、フィントラー家中興の祖ともいえるニクラウスに対して、甥のレオポルトが一種の対抗意識をもっており、それがよりによって同じ作品の異なる版を書かせる動機となったことは考えられよう。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の写本の多くは14世紀後半から1415年頃までに書かれている。しかも書記伝承の中心はドイツ語圏南部のオーストリアとバイエルンだった（Kornrumpf（1988）, S. 498f.）。この年代記は1370–80年の成立直後にたちまち大きなブームを呼び起こしたといえる。ニクラウス・フィントラーとその甥レオポルトはどちらも野心家であり、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』を利用する積極的な動機があった。当時人々の耳目を集めていた作品の写本を書かせることで、その財力を人々に見せつける意図があったのである。

ハインツ・ゼントリンガーの名で書かれた史料はもう１点残されている。修道士ベルトルトの『聴罪司祭法大全』（Rechtssumme：13世紀末にヨハネス・ルムズィクJohannes Rumsikが書いたSumma confessorumをドミニコ会修道士ベルトルトBertholdがドイツ語に訳したもの）の写本で、現在インスブルック大学図書館が所蔵している（Cod. 549. Vgl. Weck, S. 93–99; Hamm; Johanek）。これは1390年に書かれたものである。この写本にも成立のいきさつが記されているのでここに示す。（本文はWeck, S. 93による。）

> Ditz puoch hat geschriben Hainrice Sentlinger von Muenichen. vnd ist auch vol pracht do man zalt von Christus purd tausent vnd drew hundert vnd newntzik jar in dem manod Julius an dem xxj. tag dez manotz.
>
> この本を書いたのはミュンヘン出身のハインリツェ・ゼントリンガーである。完成した時はキリストの生誕から数えて千と三百と九十年七月でその21日目であった。

1390年７月21日に書き終えた写本の筆者の名はハインリツェ（Hainrice）とあり、今日のハインリヒ（Heinrich）のはずだが、ハインツ・ゼントリンガーと同一人物とみなすのが現在の定説である（Weck, S. 94; Kornrumpf（1992）, Sp. 1102f.）。執筆の依頼者も場所も書かれていないが、依頼者はニクラウス・フィントラーで（Ott（2000）, S. 323f.）、場所はルンケルシュタイ

ン城だったかもしれない[29]。この写本が（法書として当然）原典を忠実に書写したものであるのに対して（Kornrumpf (1992), Sp. 1103)、ハインツ・ゼントリンガーが書写した２つの『世界年代記』は、先に記した体裁だけでなく、内容でも大きく異なっている。５年の間隔があるとはいえ、同じ一族の２人の人物から依頼されて書かれた写本がそれぞれ独自の性格をもつ。これこそが、『世界年代記』のほぼすべての写本に共通する特徴なのである。そこで次に、2写本それぞれの内容と構成に目を向けよう。

2　２つの写本における『世界年代記』の構成

ハインツ・ゼントリンガーが書いた２点の写本は、前節で述べた通り分量でも紙質でも異なるが、本文の内容にも大きな相違がある。ルンケルシュタイン本（M3/H9）は、上述のように天地創造から皇帝フリードリヒ２世の治世までの歴史を伝えるが、ここで写本の内容を確認する。

旧約聖書の対応箇所（1–215葉）

『創世記』・『出エジプト記』・『レビ記』・『民数記』・『申命記』・『ヨシュア記』・『士師記』・『ルツ記』・『列王記』（上・下、中に『ヨナ書』・『トビト記』あり）・『ダニエル書』・『エズラ記』（上・下、中に『ユディト記』・『エステル記』あり）・『マカバイ記一』・『マカバイ記二』

新約聖書の対応箇所とそれ以後の歴史（215–306葉）

ヨアキム、アンナとマリアの生涯、イエズスの生誕、その生涯、受難、復活と昇天、使徒、マリアの死、教皇と皇帝の列伝（フリードリヒ2世まで）

この写本はモーセ五書を伝えるが、『サムエル記』（上・下）と『歴代誌』以降がほとんど省略されている。『エズラ記』を２巻に分けたのはこの写本独自の構成である。また新約聖書の関連記事も比較的自由に構成している。時代区分は合計６時代である。

大きな特徴は２つあり、第１に旧約聖書関連の記述が新訳聖書およびそれ以降の記述の2倍以上を占めている。第２の特徴は、本文の中で世俗文芸からの引用が大きな部分を占めることである。旧約聖書に沿う記述では、『マカバイ記一』の中にウルリヒ・フォン・エッツェンバハの『アレクサンダー物語』（Ulrich von Etzenbach: Alexander）が167–200葉に挿入されている。『マカバイ記一』（167–209葉）はアレクサンドロスで語りが始まるので、脈絡に不都合はない。しかし羊皮紙34葉にわたる記述は、『マカバイ記一』の記述のほとんどすべてを占める。『アレクサンダー物語』自体の長さが『列王記』（53葉）と『創世記』（48葉）に次ぐことから、この物語に大きな意味をもたせる意図があったことは間違いない。アレクサンドロスの記述が全くない写本も複数存在するからである。また新約聖書以降の部分では『ローマ人物語』(Gesta Romanorum）に依拠する記述がある。ただし『世界年代記』の他写本でしばしば長く引用されるカール大帝の記述は短く、他写本でよく引用されるシュトリッカーの『カール大帝』によるものではない。

これに対して５年後に書かれた後出本（Wo2/H12）は以下の内容である。

旧約聖書の対応箇所（1–106葉）

『創世記』・『出エジプト記』・『レビ記』・『民数記』・『申命記』・『ヨシュア記』

新約聖書の対応箇所（109–266葉）

ヨアキムとアンナ、マリアの生涯、イエズスの生誕、その生涯、受難、復活と昇天、使徒、マリアの生涯と死（これにハドリアヌス帝時代の「エルサレムの再建」が加わる）

この写本の『世界年代記』は聖書関連の記述が主で、ローマの教皇や皇帝に関する物語はほとんど含まれていない。時代区分は旧約3時代と新約以降を合わせて4時代である。しかも新約聖書の記述が旧約関連の約1,5倍あり、ルンケルシュタイン本とは明らかに異なる性格をもつ。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』は、すでに述べたようにほとんどの写本で旧約聖書関連の記述の方が長いため、この特徴はなおさら目立つ。この違いが何に由来するかを確かめるのは困難だが、ルンケルシュタイン本とは異なる版を制作しようという意識が働いたのではないだろうか。いずれにしても独自の構想が背後にあったのは間違いない。はたしてこちらの写本では、ルンケルシュタイン本にはない目次が、旧約・新約それぞれの前に置かれている。（ただし目次の紙は独立しているので、全体の執筆を終えた後で別紙に目次が書かれて前置ないし挿入されたのであろう。）

細かな違いはさらにある。ルンケルシュタイン本の旧約聖書関連部分はイスラエル人が約束の地とエルサレムに入るところで終わっているのに対し、後出本では新約聖書に対応する記述がユリウス・カエサルで始まる。（カエサルは、前出本では旧約部分に描かれる。）またルンケルシュタイン本ではアルトゥス王物語がほとんど顔を出さないが、後出本では『新ティトゥレル』（Jüngerer Titurel、1270年頃成立）がわずかながら引用されており、そこではハインリヒの『世界年代記』の写本の中で唯一パルチヴァールの名も言及される[30]。ドイツ語圏の年代記ではフランス語圏に比べて英雄叙事詩やアルトゥス王物語の利用度が著しく低く、ハインリヒの年代記が事実上初めてこれらの素材を登場させたといえるが（Kornrumpf（1984）, S. 181; Gärtner（1985）, S. 117）、この写本はその一例である。また『殉教者受難物語』（Passional）からの引用は、こちらの方がルンケルシュタイン本よりも大きな規模で行われている。

これらの違いはハインツ・ゼントリンガーの姿勢を明示している。彼は出典を単に文字通り書写したのではなく、独自色を出しながら改作する人物だった。上述のようにルンケルシュタイン本を書いてこれを完成させた時、彼は「一部を創作した」（ein tail gedichtet）と記した。『ローマ人物語』はラテン語の原典はもちろん、当時すでに存在したドイツ語の翻訳も基本的に散文である（Gerdes, Sp. 25, 32）。ハインツ・ゼントリンガーはこの作品を韻文にしてルンケルシュタイン本に取り入れた。またレオポルト・フィントラーの依頼で書いた写本に引用した『殉教者受難物語』や『新ティトゥレル』も、ゼントリンガー独自の判断によると推定される（Ott（2000）, S. 324）。これもすでに述べたが、ルンケルシュタイン城は当時の物語文芸を素材とし

たフレスコ画で知られている。そうした装飾が可能だったのは城に（あるいは近くに）題材となった物語の写本が架蔵されていたからだという仮説が古くからある（Ott（2000), S. 323)。実証は困難だが、もしそのような書庫が存在したのであれば、ハインツ・ゼントリンガーにとっては『世界年代記』の２つの写本を書く上で、またとない創作の源となったであろう。そしてこうした事情は、この作品の他写本を書いた人たちにも当てはまると考える。

中世後期の貴族がしばしば、いわゆる自前の書庫（Hausbibliothek）を有していたことはよく知られており、部分的には書庫目録も残されている。ハインリヒ･フォン･ミュンヘンの『世界年代記』に関連するデータでは、フィントラー家とその書記ハインツ・ゼントリンガーに関する記述が抜きん出て詳しく、今のところこれを超える史料は発見されていない。しかし貴族の書庫に関する研究（これは明らかにまだ発展の可能性がある）が進めば、他の写本の成り立ちに関しても説得力ある仮説が提出されることと思われる。

4　ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の本文―事例研究

それではこの作品の本文はどのように構成されているだろうか。新約聖書以降の記述をさまざまな写本によって編纂したゲルトナーらの校訂版（Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee）を見ると、冒頭のプロローグ（第１章）以外は、フリードリヒ２世について語る最後の164章までの合計18172行のほとんどすべての箇所で典拠が確認される。だが個々の出典に対する対応の仕方はその都度異なる。すべてが同じ写本に依拠しているわけではまったくないので､各写本の筆者が原典にどう取り組んだかを知ることはむろん容易でないが､以下にいくつかの事例を挙げて検討の手掛かりとしたい。

1　プロローグ（84行）

もっとも古い形態を残す写本Wo1/H1ではプロローグが欠如しているが、Ny1/H3写本にプロローグがある。そこでは以下の前書きが記されている。

> Hie hat ein end die wibel und die alt e. nu hebt sich dar nach an die new e mit sant Annen und mit Joachym irm mann.
>
> ここに聖書の旧約時代が終わる。さてこの後は新約時代が聖アンナとその夫ヨアキムの話で始まる。

一見して明らかなように､当該写本で長く語ってきた旧約時代が終わったことを宣言している。これを受けて続く本文（韻文）で、語り手はまず、語り終えたばかりの旧約時代を今一度振り返る。ノアに至るまで第１の時代（天地創造から洪水)、続くノアの時代、第３のアブラハムの時代、第４のモーセの時代、第５のダビデの時代、そして第6のバビロン捕囚の時代を語ったと述べる。そして第７の時代が新訳聖書以降であり、そこではマリアとイエズスの生涯およ

び皇帝や教皇について語るだろうと結ぶ。ここで目につくのは時代区分の数であろう。ルードルフ・フォン・エムスは歴史を6時代に分けた。ところがこの写本では一つ多く7時代である。上述のように区分された時代の数は写本により異なり、6時代だけではない。Ny1/H3のように一つ多いものもあれば逆に少ないものもある。先に見たヤンス・フォン・ヴィーンの『世界年代記』でも作者が重点を置く年代には独自色がある。ルードルフ・フォン・エムスが教科書的な時代区分をドイツ語で示したのは確かだが、その認識は社会の隅々にまで貫徹して広まっていたわけではないと考えるべきである。

さてこの写本の語り手は、自分の営為を次のように述べる。

vil churczleich wil ich ew dar nach	これからすぐ、私はみなさまに
sagen die sibent und vahen an	第7の時代を語ります。始めるのは
die new e, alz ich sie han	新約の時代で、私が
gelesen und getichtet	読んで創作し
und in dæutsch berichtet.	かつまたドイツ語に直したものです。

mit Marien wil ich vahen an; (v. 26–31) マリアから始めましょう。

29行目の動詞tichtenは、「散文を韻文に移す」という意味もあるが、出典の多くが明らかに初めから韻文であるため、ここでも「創作する」とした。ただし単に「韻文で著わす」という意味で用いたことも考えられる。「書く」を意味するschreibenも本書では頻繁に用いられている他、脚韻も考慮しなくてはならないので、ここではひとまず仮訳とする。ただこのtichtenという語の選択には、上記ハインツ・ゼントリンガーの場合で見たように、個々の文言のレベルだけではなく全体の構想も独自に決めるという姿勢を想定することが可能である。その場合先行写本の記述を改変すること、すなわち削除・追加・縮小・拡大・潤色などを行うこと自体をtichtenという動詞で表わしたと解するべきである（Kornrumpf (1992), Sp. 1104; Wetzel (2002), S. 407; Ott (2016), S. 184)。

古代から中世の史書や文芸作品でしばしば見られるように、語り手は自分が「読んだ」ことを明言している。他の箇所では「聞いた」とも記し、両方を合わせて「読みかつ聞いた」とする場合も合わせると、おびただしいほどの例がある。語りの内容が真実であることを受容者に保証する定型表現である。今見た「創作する」という語と合わせて、この写本の筆者は自分が創作した語りは真実なのだと宣言したのであろう。ゲルトナーらの校訂版で見る限り、写本の筆者（改作者）がすべてを自分で書いたのはこのプロローグだけである。この人物の独自性をひと言で表すなら、新しい文章を生み出すことではなく、既存の文章の組み合わせ方にある。

2　第2章「イエズスの生誕」(198行) と典拠の関係

古態写本Wo1/H1は、イエズスの生誕から語り始める。その記述はフィリップの『マリアの生涯』とほぼ同じ文言であるため、これが典拠だったことが明瞭に理解される。出典となった

作品自体がまとまりのよい記述をしているためであろう。そこでまず冒頭部分を引用する。左に『世界年代記』の本文を、右に出典である『マリアの生涯』を置く。

Hie ward unser herr geporn,	dô wart unser hêrre geborn,
den got zu sun hat auz erkorn,	den got ze sun het erkorn,
von Maria der rainen magt,	von Marîn der reinen magt,
alz Ysayas het gesagt.（v. 1–4）	als Jsaias het gesagt.（v. 2020–2023）

ここにわれらが主、神が息子に選ばれた方が、清き乙女マリアからお生まれになった。イザヤが預言したように。

わずかな相違はあるが全体としてほぼ同一であり、典拠であることは疑いようがない。『世界年代記』の写本は、ここから合計で198行を費やしてイエズスの生誕を語る。だがそのすべてが『マリアの生涯』からの引き写しなのではない。典拠では、イエズスの生誕は2020行から2307行まで、合計288行をもって語られる。煩瑣になることを避けるため『世界年代記』で引用されなかった部分を挙げると、①イエズスの誕生の際に現われた光に驚いたヨセフをマリアがなだめると、ヨセフは神であり人であり、また慰めと創造主である子の誕生を喜ぶという語り（2056–2090行）、そして②２人の助産婦がマリアを見たが子を産んだ徴が体に現われておらず、確かめようとして逆に腕も体も萎えてしまい、神の奇蹟を信じたという語り（2104–2187行）である。

ところがこの第２章では、イエズスの誕生の語りの途中でヤンス・フォン・ヴィーンの『世界年代記』による文言が埋め込まれている。この部分も典拠を右に置く形で引用する。

Do daz geschach aldo,	und was dô geborn dâ
daz in Betlahem Juda	in Bethlehem Judâ
geporn ward Jesus Christ,	Marien sun Jesus Krist,
der noch zu himel ist,	als er noch hiut ze himel ist.
do waz zu Rom Augusto	（v. 21813–21816）
kaiser gewesen aldo	
zwai und virczig jar;	
daz sagt daz puch furwar.	
auch dient die werlt all gelich	
in der zeit dem roemischen reich.	
ez waz der vrid die weil so gancz,	ez was der frid bî im sô ganz,
daz dhain golt waz so glancz,	daz dhein golt was sô glanz,
hiet man ez an dem veld lan,	hiet man ez an dem veld lân,
daz weder weib noch man	daz weder wîp noch man,
niemmant dorst an rueren	nieman getorst gerüeren

noch von dannen fueren,
alz guot vrid waz an der vart.
in dem vrid got geporn wart.
nu jehent die Juden, die haiden alt,
daz von Augustus gewalt
war pei den zeiten der vrid guot.
ez spricht aber der pfaffen muot,
ez sei von Jesus Christ geschehen,
daz wellent si gemain jehen.
also ist ir paider streit
noch under in zu aller zeit.

Augustus der gewaltig man
hiez in der zeit auz lan
alle die in den jarn
in allen landen gevangen warn.
(v. 115–144)

noch fürbaz nindert füeren.
(v. 21839–21844)

nû jehent di juden, die heiden alt,
daz von Augustus gewalt
wær ze den zîten fride guot,
(v. 21817–21819)
ez sî von Jesu Krist geschehen.
des wellent si gemein jehen.
alsô ist ir beider strît
noch under in ze aller zît.
(v. 21823–21826)

er was ein sô gewaltic man,
daz er alle die hiez lân,
die gevangen wâren
bî den selben jâren.
(v. 21831–21834)

ハインリヒの『世界年代記』の訳は以下の通りである。(ヤンス・フォン・ヴィーンの作品に対応しない部分は括弧でくくる。)

ユダヤのベツレヘムでイエズス・キリストが誕生した。今日なお天上にいらっしゃるあの方が。(当時ローマではアウグストゥスが皇帝になって42年目だった。これは書物が真実として語っています。また当時は全世界がみなローマ帝国に服していた。)この時代は隅々まで平和だったので、たとえ誰かが黄金を野に忘れ、それがどんなに輝きを放っていても、女も男も誰もあえて触ろうとはせず、まして持ち去ろうともしなかったのである。(かくもすばらしき平和が路傍にもあったのだ。その平和の中で神が生まれたのである。)今でも古来の異教徒ユダヤ人はこう語る。アウグストゥスの力のおかげで当時はあれだけ平和だったのだと。(だが聖職者たちはこう告げる、)それはイエズス・キリストのおかげなのだと、みな口を揃えて主張する。それゆえ両者の争いが今なお事あるごとに生じるのだ。権勢あるアウグストゥスは、当時(すべての国で)捕らわれていた人々をすべて解放するよう命じた。

ヤンス・フォン・ヴィーンに本筋から離れたエピソードを語る傾向があることはすでに述べたが、この語りはまさにそうした例の典型といえるだろう。そしてハインリヒの年代記の写本Wo1/H1の筆者にもこの話は気に入ったに違いない。出典の話の順序を変え、また不要と判断した記述は捨てるという工夫を惜しんでいない。

ゲルトナーらの校訂版では、このあと第10章（キリストの復活をユダヤ人が疑う場面）の途中まで写本Wo1/H1の記述が続く。その部分では、今見たフィリップの『マリアの生涯』が主要な典拠として用いられているが、これに劣らぬ頻度と量でグンダッカー・フォン・ユーデンブルクの『キリストのまもり』（Gundacker von Judenburg: Christi Hort）が利用されている。さらには４つの福音書、『黄金伝説』、コンラート・フォン・ハイメスフルトの『主の復活』（Konrad von Heimesfurt: Diu urstende）、ハインリヒ・フォン・ヘスラーの『ニコデモ福音書』（Heinrich von Hesler: Das Evangelium Nicodemi）などが典拠として加わる。それらが比較的まとまった形で長く引用されている部分は多いのだが、典拠が数行ごとに、それこそ激しく入れ替わっている箇所も少なくない。出典となった作品を一つひとつ読むと、みなそれぞれまとまった記述がなされている。それにもかかわらず配列を変えたのはなぜだろうか。この「問い」に答えることは、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の研究における大きな課題である。

3　散文から韻文へ―『ザクセン世界年代記』からの引用

ハインリヒの年代記の典拠は多くが韻文だが、散文資料を用いてこれを韻文にした部分もある。とくに『ザクセン世界年代記』からはたびたび引用されている。そこで続けてWo1/H1写本を例にとり、ハインリヒがどのように文体の違いを処理したかをたどる。以下はマルクス・アウレリウス帝の時代を語る場面である。徳高き皇帝は弟ルキウスとセレニウスの２人を共同皇帝にする。（史実はルキウス・ウェルス１人なのだがここでは２人に分けられる。）セレニウスはヴェネチアで戦死する、という部分が語られる。典拠が散文であることと先行作品であることから、ここではまず『ザクセン世界年代記』を引用し、次にハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の対応箇所を置く。

> In deme 162. jare van godes gebort, van Rome stiftunge 913 jare Marcus Aurelius Antonius de vertegede keiser wart, en edele man van alden Romeren, unde was daran 19 jar unde twe manede. Dese hadde alle dogede unde was en bescermere aller armen, unde of he nicht ne ware keiser worden, Romisch ere were an den tiden verdorven. He nam durch sine groten guode an dat rike twene gesellen Antoninum unde Severum. Do begunde dat rike twene keisere hebben. De selve Severus dref orloges vile unde starf to Venedie.（Sächsische Weltchronik, S. 106, z. 23–29）
>
> 神の誕生から162年目の年、すなわちローマの建国から913年に、マルクス・アウレリウス・アントニウスが第14代皇帝となった。由緒あるローマ人の中でも高貴な人だった。そして19年と２か月在位した。この皇帝はあらゆる徳を備え、貧しき者すべての保護者だった。もし彼が皇帝にならなければ、ローマの名誉はその時点で破滅していただろう。彼は大いなる好意により帝国に二人の同輩アントニウスとセヴェルスを招いた。ここに帝国は二人の（共同）皇帝を得たのである。このセヴェルスはたびたび戦争に出てヴェネチアで亡く

なった。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』（第31章）はこれを以下のように語る。

Do nu der chaiser Antanio	さてアントニウス帝が
waz tot in Rom aldo,	ローマで亡くなった時
do erchuren die Romaer ze hant	ローマの人々がただちに選んだのは
ainen edeln weigant,	高貴なる戦士で
der hiez Marcus Arelius.	その名をマルクス・アレリウスといった。
von dem sagt die koronik alsus,	この人物について年代記はこう語ります。
daz er von gepuerd waer	すなわち彼は生来
ein rechter Roemer	生粋のローマ人であり、
und ein tugenthafter man.	徳高き男であった。
vil gern er auch beschirem began	またいかなる時でも貧しき人々を
sein arm lauet zu aller zeit.	すすんで保護した。
dew geschrift uns von im sait,	書物が彼について私たちに語るところでは、
ob er nicht kaiser gewesen war,	もし彼が皇帝になっていなければ
daz daz reich und die Roemer	帝国とローマの人々は
waer in der zeit verdorben gar.	その時点ですっかり破滅していたであろう。
auch nam er durch sein guet dar	また彼はその好意により
zwen kaiser zu im an daz reich,	二人の（共同）皇帝を自らの国に招いたので
daz er dester gewaltichleich	彼は帝国の平和を一層力強く
daz reich befrit dest paz.	またより良く守った。
der ain kaiser sein pruder waz,	皇帝の一人は彼の弟で
der selb hiez Lucius;	名をルキウスといった。
der ander hiez Serenius,	もう一人はセレニウスという名で、
der selb traib urliugs vil.	たびたび戦争に出た。
dar nach in churtzem zil	だがその後まもなくして
starb der selb kaiser drat	この皇帝は急死した。
ze Venedig in der stat,	場所はヴェネチアの町だったと、
alz mir die koronik fur jach.（v. 1–27）	私には年代記が伝えています。

両者を比べると、名前の違いがまず目につく。主役の皇帝の名が『ザクセン世界年代記』ではマルクス・アウレリウス・アントニウスであるのに対して、ハインリヒの『世界年代記』ではマルクス・アレリウスであり、共同皇帝の名も前者ではアントニウスとセヴェルス、後者ではルキウスとセレニウスに変わっている。しかし「徳操高き人物であること」、「貧しい人をすすんで保護したこと」、「この人物でなければ国は滅びていたであろうこと」、「好意から二人の共

同皇帝を招いたこと」、「その一人はたびたび戦争に出たがヴェネチアで死んだこと」が共通している。その上でハインリヒの年代記は、皇帝の数が3人になったことがより明確に理解できるように表現している。こうした工夫や散文を韻文に変える技が巧みかどうかは、もとより筆者には判断できない。150年ほど先に成立した『ザクセン世界年代記』では、韻文の『皇帝年代記』が当初韻文のまま引用されていたものの、後のC系では散文に直して記載された写本があることをすでに述べた。それと逆の現象がここで起きたことになる。しかし元来14世紀末以降は、散文による文書が爆発的な勢いで増えていく。それにもかかわらず各写本の筆者は頑なまでに韻文体に固執し続け、また多くの場合多数の挿絵が描かれている。それら所与の要件を合わせて考えると、各写本の制作を依頼した人々は、いわゆる宮廷文芸の伝統形式を自分の所有物で再現する強い願望を持っていたといえる。『ザクセン世界年代記』を韻文化することは、この写本の筆者には当然のことだったのである。

5　おわりに

12世紀半ばの『皇帝年代記』や13世紀半ばにルードルフ・フォン・エムスが著わした『世界年代記』にある格調の高さは、その後の作品では見られなくなる。かつては一人（ないしはグループ）が文体も内容も一貫した作品を書き上げることを目指していた。ところが13世紀後半以降、年代記の著者（あるいは新たな写本の筆者）は、独創的な記述をすることではなく、既存の文書をいかに巧みに組み合わせるかに意を向けるようになる。この時代の作品に関する文学史の記述は概して厳しい。従来は「亜流」（Epigonen）という表現で否定的な価値判断をされることが少なくなかった。冒頭に引用した歴史学の大家グルントマンの評価もそのような例である。たしかに、現代に生きる人間が趣味や娯楽として読むのであれば、『パルチヴァール』や『エーレク』、『トリスタン』、『ニーベルンゲンの歌』などの方がはるかに楽しめるだろう。しかしそのような作品ばかりを対象とすることで中世文学の研究が完結するはずはない。正反対の印象を与える作品群がなぜこれほどまでに広まったかも考えなければ、中世文学の全体像を健全に理解することはできない。

『パルチヴァール』については現在87の写本が知られている（Schirok, S. 329）[31]。これらは多少の字句の変更はあっても、内容が大きく変わることはない。現存最古の写本が書かれた13世紀前半から最後の写本が成立した15世紀後半まで、異なる系統が混合した写本は認められても、『パルチヴァール』はやはり『パルチヴァール』なのである。しかし年代記としてはもっとも名高いルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』に残されているほぼ同数（91[32]）の写本のあり方はまったく異なる。ルードルフの作品が今日校訂版で見られるのと同じように、すなわち全体像を俯瞰できるように記載された写本は、実はごくわずかしか存在しない。それどころか、後の写字生がルードルフの名を尊重した形跡もしばしばまったく見られない。今日にい

う著作権など、彼らには無縁のものだった。自分が新たに書くべき作品（写本）は、報酬と資材を提供した依頼者のために作成する。考慮すべきはその人物の意向であり、過去の年代記作者の意図を忖度するなどありえないことだった。たとえ原作者の名声は高くても、敬意ゆえに典拠の本文全体をそのまま書き写すという発想など写字生にはなかったのである。はたして多くの写本でルードルフの年代記は解体されて必要なところだけを抜き出され、文言にも改変を加えられていった。

それらのテクストはさらに変容を被る。14世紀末から15世紀にかけて、聖書を題材に挿絵も施された「物語聖書」（Historienbibeln）が上部ドイツ語圏を中心に大きく広まる。受容者は都市貴族を中心とする人々で、彼らの多くはラテン語の識字力を有していなかった。そうした人々のために聖書のさまざまな素材を簡潔にまとめ、時に世俗文芸も取り入れながら絵入りで楽しめるよう工夫した物語聖書が書かれたのである。その需要は大きく、聖書は当然として、ここで見てきた世界年代記の諸作品、すなわちルードルフ・フォン・エムスやヤンス・フォン・ヴィーン、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』、『ザクセン世界年代記』などに加えて『クリストヘレ年代記』もたびたび種本として利用された。フィリップの『マリアの生涯』も好個の素材だった（Gerhardt, Sp. 67–75）。

こうして見ると、「世界年代記」の諸作品については既成の文芸概念を見直す必要があるといわなくてはならない。ここまで述べてきた「世界年代記」の写本伝承に関する記述の最後に「物語聖書」を引くのは、極端な考え方に見えるかもしれない。しかし私たちは、一般になじみ深い宮廷物語などとは全く異なる書承形式があることを認識するべきである。「著者」や「原典」に固執する考え方を改めなければ、いわゆる「寄せ集め」という中世後期に特有の現象の理解を進めることはできない。こうした作品では一つの写本の校訂版をもって全体を代表させることが不可能なのである。「代表」させるという発想自体を転換させる必要がある。（その意味では、校訂版の制約があるとはいえ、小稿で「古態を残すWo1/H1写本」に再三依存した態度も見直す必要がある。）

小稿のはじめで、「流動する本文」への関心が高まる中、「特定の写本の字句を忠実に再現する原則」では対処できない作品がある状況にどう対応すべきかという課題を設定した。この年代記の各写本で本文が「流動する」理由は、冒頭に天地創造を配すること以外には特別な枠がはめられていない点にあると考える。すなわち、各写本の筆者にはどこまでを書かなければならないという意識が欠如していた。あるいは特定の記事は必ず挿入すべしというような制限に束縛されることがなかったのである。小稿第２章で見た各年代記では、最初の２点の『皇帝年代記』（1150年頃）と『ザクセン世界年代記』（1230年頃から1275年頃）が、（原）著者の活躍した時代までを描く。どちらも「作者の現在」までという、オットー・フォン・フライジングの『年代記あるいは二つの国の歴史』（Otto von Freising: Chronik［…］、1146年頃）[33]も守った史書の伝統に則るパターンで構成されている。どちらの作品も50以上の写本が残され、また引

用頻度も高いことから、その後のドイツ語年代記の雛形になったと想定してよかろう。ただあとに続くルードルフ・フォン・エムスの『世界年代記』と『増補クリストヘレ年代記』は旧約聖書の記述のみのうえ未完であるため、これらがその後の年代記作者や写字生の意識に与えた影響を推し量ることはできない。ヤンス･フォン･ヴィーンの『世界年代記』(1284年以降成立)はフリードリヒ２世（1254年没）の記述で終了している。ルードルフ・フォン・ハープスブルクのローマ王就任（1273年）で列伝は再開してもよいはずだが、当時のオーストリアにはこの王の支配に対して複雑な感情があったので、あえてフリードリヒの死をもって時代の画期としたのかもしれない。いずれにしても、ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』が成立した時点では、「作者の現在」までを綴るという意識はなくなっていた。それよりはさまざまな素材を寄せ集めて彩り豊かな物語を語ることの方がはるかに重要だった[34]。「旧約聖書の時代と新約聖書およびそれに続く皇帝と教皇の列伝」を語るのが大まかな枠組みであり、写本の制作に携わった人々にとってはその枠内で物語をいかに巧みに構成するかが腕の見せ所だったのである。

しばしばエピソードが削られあるいは追加され､また縮小･拡大･潤色が生じる理由としては、まさに今述べた大まかな枠組のせいで、内容が全体として有機的につながる構造でなかったことが考えられる。さまざまな挿話がいくらでも抜き差しできるよう、初めから性格が規定された物語なのである。しかも型にはまった類話が多く、語りの内容に（改）作者の創作力が十分発揮されているとはいい難い[35]。そもそも、典拠となった先行年代記（とくに『増補クリストヘレ年代記』）の写本自体もしばしば寄せ集めである。ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』諸写本の筆者にも同じ指向性があったからこそ、語る内容の彫琢よりも素材の収集と組み合わせの妙に力を注いだのである。それゆえであろう、ハインリヒの年代記では第２章の末尾に現われる「さてこの話は止めて次に移りましょう」(nu lazz wir die red still stan / und heben wider an, (v. 195f.)) という繋ぎの表現が、それ以降の章で定形化したといえるほど頻出する。イエズスの生涯のように先行する文献が豊富にあれば、そのまま引用しても彩り豊かに語ることができる。しかし皇帝や教皇の列伝はしばしば単なるエピソードの披歴だけで終わるなど類型的な話が多くなる。これは明らかにハインリヒの語りの特徴である。

一方写本ごとの独自性が強くなると、作品の校訂版をどのように編纂するかが大きな問題となる。テクストがなければ研究自体が成り立たないからである。その意味で、ゲルトナーらがその校訂版に応用した考え方、すなわち古態を基本としながらも個々のエピソードごとに底本を選択するという原則は支持されるべきである｡同じ内容の写本が一つもないということは、とりもなおさずどの写本にも独自性があることを意味する。少なくても３万行、多いものでは10万行にのぼる写本の校訂など、個人の力ではきわめて困難である。かつてドイツ研究振興協会から助成を得て大規模な研究を推進したヴュルツブルク大グループですら、校訂版の刊行には至らなかった。(旧約聖書に関する記述の部分的な校訂は行っている。) ゲルトナーたちの校

訂版（新約聖書以降）に対する書評はいずれも偉業を讃えているが、同時に、この校訂版のような写本は存在しないとも指摘する（Hahn; Klein（2010）; Quak; Bleumer）。全体で164章のテクストで、底本となる写本が再三替わっているからである。だがそれはやむを得ない。古態の写本Wo1/H1では皇帝列伝に大きな欠損がある。またそこではシュトリッカーの『カール大帝』のほぼ全文が引用されているが、ゲルトナーらはこの年代記の原作にはなかったものと判断して校訂版には記載していない。それを惜しむのは理解できるが、すべてのエピソードをもっとも記述の詳しい写本から取り込むと20万行を超えてしまう。取捨選択は避けられない。さもなければ、今日の状況で新たな校訂版を刊行することはとても望めない。電子媒体でも大きな困難を克服しなければならない。ゲルトナーらの現実的な判断はすでにコンラート・フォン・ヴュルツブルクの『トロイ戦争』（Konrad von Würzburg: Trojanerkrieg）の校訂版でも部分的に生かされている。克服すべき課題はあるが（Lienert（2016））、文献学のあり方に再考を促すことは確実で、今後同じような状況にある作品を編纂する場合にひとつの指針となるであろう。

ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の研究が抱える課題は多数あり、どれも解決が容易でないように見える。しかし現地で最前線に立つ研究者であればさほど難しくはないのではないかと思われる課題もある。そのひとつは各写本の行数を示すことである。データは多くの写本で概数すら明らかにされていない。上述のように今までギヒテルを先駆けとしてコルンルンプフ、ゲルトナーのグループ、そしてヴュルツブルク大グループが莫大な時間と労力を投入し、写本群を対象とした研究を行っているが、どの写本も先に述べたように長大なテクストをもつせいであろう、各写本の正確な行数はどこにも記されていない。しかしこれらのデータは、せめて概数だけでも明らかにされるべきである。写本を作成するために費やされた労力を一定程度推測し、比較することができるからである。その他にもさまざまな情報が得られるに違いない。また小稿でも並記したように、各写本には２つの系統による表記法がある。写本の所在地に合わせたもの（Wo1などヴュルツブルク大グループが用いる）とコルンルンプフ以降ゲルトナーのグループが使用するもの（H1など）である。どちらにもそれぞれ利点はあるが、やはり統一することが望ましい。以上２点について、関係者の尽力と歩み寄りを期待したい。

註

1）包括的な情報はOtt（1981）, Ott（2016）で得られる。また研究文献としては以下の文献が特に重要で、小稿も多くを負っている：Gichtel; Gärtner（1985）; Kornrumpf（1988）; Brunner; Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee.

2）データはHandschriftencensus: Heinrich von München: ‘Weltchronik’. URL: http://www.handschriftencensus.de/werke/544（2017年11月７日確認）に依拠する。

3）この点は軍記物語の『平家物語』や『太平記』がのちに史書として読まれたのと同じ現象といえる。英語

でwar chronicleとも訳される軍記物語の伝承形態や受容史とは比較（対比）が可能であろう。

4）Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee, S. VII; Gärtner（2013）, S. 71–73. 後述する「ゴータ写本」を校訂する試みが2度、「ルンケルシュタイン写本」が1度あった。

5）Vgl. Rettelbach（1998）; Rettelbach（2004）, Sp. 420. 本作品にはまだ全体を校訂した版がないが、BrunnerおよびRettelbach（1998）, Band 2/2でいくつかの部分を読むことができる。

6）Passional. Band I, II. 第1書と第2書は合計42480行。第3書を校訂したDas Passional. Hrsg. von Karl Köpkeは総行数の表示がないが、試算では6万行余りある。なおRichert, Sp. 333は第1書・第2書・第3書の合計を約15万行としている。

7）ヨアヒム・ブムケの用語'der unfeste Text'については寺田（2005）を参照されたい。

8）Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. 本書は新約聖書に対応する部分とその後の皇帝や教皇の歴史を著わしたものである。旧訳聖書に対応する部分は校訂されていないが、ドローテア・クラインがいくつかの部分について複数の写本の本文を対照できる形で示している。Klein（1998c）, Band 3/2.

9）ヴォルフェンビュッテルのアウグスト公図書館が所有する。Vgl. Spielberger, S. 118–123; Rettelbach（1998）, Band 2/1, S. 101–239. ハインリヒの『世界年代記』の各写本を系統的に記述したコルンルンプフは、すべての完本写本に1から19の番号を与え（Kornrumpf（1988）, S. 500–502）、のちにゲルトナーたちもこれを踏襲しH1からH19としている。しかしヴュルツブルク大グループは写本の所在地の頭文字と数字を組み合わせた記号を用いており、現在両系統が混在している。小稿では現状を鑑みて両者を並記する。

10）写本M5/H8およびGo1/H15にはDaz ich hainreich von payernlant /（…）/ Von Munichen auz der stat「バイエルンの国、ミュンヘンの町出身の私ハインリヒ」という表現がある。Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee, S. 3.

11）以下各年代記に関する記述はそれぞれの校訂版に可能な限り基づくが、とくに以下の文献を参考にした：Ott（1984）; Gärtner（1985）; Klein（1998a）; Müller; Herweg.

12）基礎研究としてOhlyの他、日本における先行研究としては平尾（1967）；平尾（1969）；山本がある。

13）邦訳としてルードルフ・フォン・エムス『善人ゲールハルト―王侯・騎士たち・市民たち』がある。本書では作品の翻訳だけでなく、訳者平尾浩三と横山由広・森澤万里子・岩波敦子による浩瀚な解説がなされている。また平尾（1999）も参照。

14）Rudolfs von Ems Weltchronik［…］. 翻訳は四反田（1993）に依拠する。名訳であるが一部改めさせていただいた。なお四反田（1997）でも本作品に関する考察が展開されている。

15）Menhardt, S. 422. ヘルマン・メンハルトによる命名がすでに定着して今日に至っている。

16）Christherre-Chronik.『増補クリストヘレ年代記』はまだ校訂されていないが、公開されたリンツ写本（Linz, Oberösterreichische Landesbibliothek, Cod. 472）はほぼ同じ文言である。URL: http://digi.landesbibliothek.at/viewer/image/472/5/（2017年11月7日確認）.

17）鈴木, 275頁。同論文は美術的視点に重点を置いているが、中世ドイツの各年代記を詳細に紹介する他、多数の写真も収録している。

18）「エニケル」（Enikel）は名前でないという指摘は古くからあるが、具体的にはHeinzle, S. 54およびKnapp, S. 236に詳しい。

19）Jansen Enikels Werke. Weltchronik（S. 1–574）. なおヤンス・フォン・ヴィーンは『君公の書』（Fürstenbuch）も著わしており、そこでも同様の自己紹介をしている：ich bin Jans genant, / daz getiht ich von mir selben vant. / hern Jansen eninchel heize ich; / des mac ich wol vermezzen mich, / daz ich ein rehter Wiener bin.「私はヤンスという名である。この物語を私は自分自身で創作した。ヤンス殿の孫と私は呼ばれる。生粋のウィーン人であることを私は強く誇りに思う。」Jansen Enikels Werke. Fürstenbuch（S. 597–679）, v. 19–23.

20）Spielberger, S. 113–198. シュピールベルガーは完本の数を19ではなく18としている。Vgl. Klein（1998a）, S. 35.

21）このconferはconfessorisの誤写であろう。Gichtel, S. 2に従う。

22）なお原文では2行目のPuochの綴りが異なり、母音uの上にoが書かれている。しかしここでは便宜上uの右にoを置く。（以下類似の文字も同様に表記する。）

23）ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』では残存する完本19点のうち、このルンケルシュタイン写本とゴータ研究図書館蔵本を含む4点、および断片写本１点が３列組である。ドイツ語圏では珍しいこの形式ついてはKlaus Kleinを参照。この論文では３列組の写本に書かれた作品がリストアップされている。宮廷物語や英雄叙事詩などもあるが、年代記や歴史物語、そしてとりわけ宗教物語の多さが際立っている。イエズスやマリア、殉教者の受難、教父などにまつわる作品を豪華本に仕立てることが美徳だったのだろう。

24）写本B2/H2は図版（Die Arolser Weltchronik）が刊行されている。

25）写本の綴りはNiclas Vintlerだが、ここでは通例に従う。なおVintlerの発音（語頭のvは［v］ではなく［f］）についてはエリーザベト・リーナート氏（Frau Prof. Dr. Elisabeth Lienert）のご教示を得た。御礼を申し上げる次第である。

26）ルンケルシュタイン城の歴史についてはHaug; Otto (2016), S. 182を参照。そこに記されるように城の所有者は転変としたが、ルンケルシュタイン写本は1929年までフィントラー家が保持し続けた。その後現在まで、上述のようにバイエルン州立図書館が所蔵している。

27）写本の詳細はLienert (1990), S. 355–357; Spielberger, S. 157–161を参照。なお先の古態本Wo1/H1も同じ図書館に所蔵されているため、「ヴォルフェンビュッテル本」という表現を避ける。

28）通行税を徴収する立場であった人物としては、のちに皇帝マクシミリアン１世の委託で「アンブラス英雄本」（1504–1516/17年に成立）を執筆したハンス・リート（Hans Ried）がよく知られている。職務内容は詳らかにしないが、ハンス・リートは能筆として1496年から皇帝の書記官房にいた。1500年にはボーツェン近郊のアイザック河畔（ブレンナー峠を水源にボーツェンを経てエチュ川に合流する）で税吏となるが、1502年に皇帝から英雄本の書写を依頼される。そのため幾度か税吏としての職務を免じられ、1508年から書写に専念するようになった。しかし1512年に今度はインスブルックの官房で勤務することになる。1514年再び職を辞するが、書写の作業は継続していた。1516年春に死亡している。（Janota, Sp. 324.）時間的、地理的かつ職務上の近さを考えると、ハンス・リートがフィントラー家およびハインツ・ゼントリンガーを知っていた可能性はある。

29）Handschriftencensus: Bruder Berthold（von Freiburg）: ‘Rechtssumme’（Innsbruck, Cod. 549）. URL: http://www.handschriftencensus.de/4993（2017年11月７日確認）.

30）しかも聖杯王であるだけでなく、ローマの皇帝ウェスパシアヌスとティトゥスの親族としてである。その部分のテクストはコルンルンプフが校訂している（Kornrumpf (1984), S. 194–197）。Klein (1998b), S. 206も参照。これらの記述は『新ティトゥレル』に由来する。

31）Vgl. auch: Handschriftencensus: Wolfram von Eschenbach: ‘Parzival’. URL: http://www.handschriftencensus.de/werke/437（2017年11月７日確認）.

32）Handschriftencensus: Rudolf von Ems: ‘Weltchronik’. URL: http://www.handschriftencensus.de/werke/322（2017年11月７日確認）.

33）本書は作者の異父兄コンラート３世（1152年没）の治世1146年までの歴史を語る。

34）２つの写本（Go1/H15とM5/H8）では、叙事詩『ディートリヒの敗走』からディートリヒ・フォン・ベルンの祖先の系譜が引用されている。これも素材収集欲によって引き寄せられたのであろう。寺田（2016), 21–22頁を参照されたい。

35）同様の可能性については、日本文学研究においてもすでに津田, 57–88頁が指摘しており、対比による研究の進展が期待される。寺田（2017), 126頁も参照されたい。

参考文献

（以下叢書名は可能な限り略号を用いる。ただし出版社名と学術誌は略さない。）

1. 作品および史料

Albrechts von Scharfenberg Jüngerer Titurel. Band I, II/1, II/2. Hrsg. von Werner Wolf. Berlin: Akademie 1955, 1964, 1968（DTM 45, 55, 61）; Albrechts Jüngerer Titurel. Band III/1, III/2, IV. Hrsg. von Kurt Nyholm. Berlin: Akademie 1985, 1992, 1995（DTM 73, 77, 79）.

Alexander von Ulrich von Eschenbach. Hrsg. von Wendelin Toischer. Tübingen: Litterarischer Verein in Stuttgart 1888 (Bibliothek des Litterarischen Vereins in Stuttgart 183).

Arabel: Werner Schröder: 'Arabel'-Studien I, II, III, IV, V, VI. Wiesbaden: Steiner 1982–1993. (Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Mainz. Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse 1982/6, 1983/4, 1984/9, 1988/6,7, 1993/4).

Die Arolser Weltchronik. Ein monumentales Geschichtswerk des Mittelalters. Hrsg. von Claudia Brinker-von der Heide/Jürgen Wolf. Mit Beiträgen von Kurt Gärtner/Ralf Pälser/Martina Sitt. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2014.

Bruder Philipps des Carthäusers Marienleben. Hrsg. von Heinr[ich] Rückert. Quedlinburg/Leipzig: Basse 1853 (Bibliothek der deutschen National-Literatur 34). Nachdruck Amsterdam: Rodopi 1966.

Christherre-Chronik. Text der Göttinger Handschrift 2° Cod. Ms. Philol. 188/10 Cim. (olim Gotha, Membr. I 88). Transkription von Monika Schwabbauer. Editionsprojekt 'Christherre-Chronik' unter der Leitung von Kurt Gärtner am Fachbereich II der Universität Trier 1991. URL: http://dtm.bbaw.de/bilder/christh.pdf (2017年11月 7 日確認).

Frutolfs und Ekkehards Chroniken und die anonyme Kaiserchronik. Hrsg. und übersetzt von Franz-Josef Schmale/Irene Schmale-Ott. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1972 (FSGA 15).

Gundackers von Judenburg Christi Hort aus der Wiener Handschrift. Hrsg. von J. Jaksche. Berlin: Weidmann 1910 (DTM 18).

Heinrich von Hesler: Das Evangelium Nicodemi. Hrsg. von Karl Helm. Tübingen: Litterarischer Verein in Stuttgart 1902 (Bibliothek des Litterarischen Vereins in Stuttgart 224). Nachdruck Hildesheim/New York: Olms 1976.

Jansen Enikels Werke. Weltchronik, Fürstenbuch. Hrsg. von Philipp Strauch. Hannover: Hahn 1891–1900 (MGH; Deutsche Chroniken 3). Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1980.

Die Kaiserchronik eines Regensburger Geistlichen. Hrsg. von Edward Schröder. Hannover: Hahn 1892 (MGH; Deutsche Chroniken 1,1). Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1984.

Der keiser und der kunige buoch oder die sogenannte Kaiserchronik, Gedichte des zwölften Jahrhunderts von 18,578 Reimzeilen. Hrsg. von Hans Ferd[inand] Maßmann. 3. Theil. Quedlinburg/Leipzig: Basse 1854.

Konrad von Heimesfurt: »Unser vrouwen hinvart« und »Diu urstende«. Mit Verwendung der Vorarbeiten von Werner Fechter hrsg. von Kurt Gärtner/Werner J. Hoffmann. Tübingen: Niemeyer 1989 (ATB 99).

Konrad von Würzburg ›Trojanerkrieg‹ und die anonym überlieferte Fortsetzung. Kritische Ausgabe von Heinz Thoelen/Bianca Häberlein. Wiesbaden: Reichert 2015 (Wissensliteratur im Mittelalter 51).

Die Lebenszeugnisse Oswalds von Wolkenstein. Edition und Kommentar. Band 1: 1382–1419, Nr. 1–92. Hrsg. von Anton Schwob unter Mitarbeit von Karin Kranich-Hofbauer/Ute Monika Schwob/Brigitte Spreitzer. Wien/Köln/Weimar: Böhlau 1999.

Otto Bischoff von Freising: Chronik oder Die Geschichte der zwei Staaten. Übersetzt von Adolf Schmidt. Hrsg. von Walther Lammers. 5., unveränderte Auflage. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1990 (FSGA 16).

Das Passional. Hrsg. von Karl Köpke. Quedlinburg/Leipzig: Basse 1852 (Bibliothek der gesammten deutschen National-Literatur 32).

Passional. Band I: Marienleben / Band II: Apostellegenden. Hrsg. von Annegret Haase/Martin Schubert/Jürgen Wolf. Berlin: Akademie 2013 (DTM 91/1,2).

Rennewart: Ulrich von Türheim: Rennewart. Aus der Berliner und Heidelberger Handschrift hrsg. von Alfred Hübner. Berlin: Weidmann 1938 (DTM 39). Nachdruck Berlin/Zürich: Weidmann 1964.

Rudolfs von Ems Weltchronik. Aus der Wernigeroder Handschrift. Hrsg. von Gustav Ehrismann. Berlin: Weidmann 1915 (DTM 20). Nachdruck Berlin/Zürich: Weidmann 1967.

Sächsische Weltchronik. In: Sächsische Weltchronik, Eberhards Reimchronik von Gandersheim, Braunschweigische Reimchronik, Chronik des Stiftes S. Simon und Judas in Goslar Holsteinische Reimchronik. Hrsg.

von Ludwig Weiland. Hannover: Hahn 1877 (MGH; Deutsche Chroniken 2). Nachdruck München: Monumenta Germaniae Historica 1980, S. 65–279.

Strickers Karl der Große. Hrsg. von Johannes Singer. Berlin/Boston: de Gruyter 2016 (DTM 96).

Weber, Stefanie: Strickers Karl der Große. Analyse der Überlieferungsgeschichte und Edition des Textes auf Grundlage von C. Hamburg: Kovač 2010 (Schriften zur Mediävistik 18).

Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. Hrsg. von Frank Shaw/Johannes Fournier/Kurt Gärtner. Berlin: Akademie 2008 (DTM 88).

Wolfram von Eschenbach: Willehalm. Nach der Handschrift 857 der Stiftsbibliothek St. Gallen. Mhd. Text, Übersetzung, Kommentar. Hrsg. von Joachim Heinzle. Mit den Miniaturen aus der Wolfenbütteler Handschrift und einem Aufsatz von Peter und Dorothea Diemer. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1991 (Bibliothek des Mittelalters 9).

Die Exzerpte aus Wolframs 'Willehalm' in der 'Weltchronik' Heinrichs von München. Hrsg. von Werner Schröder. Berlin/New York: de Gruyter 1981 (Texte und Untersuchungen zur 'Willehalm'-Rezeption 2).

伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・有川貫太郎・松浦順子（訳）「ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『ヴィレハルム』」『名古屋大学教養部紀要 外国語・外国文学』17号1973年, 105–140頁・同18号1974年, 60–80頁・同19号1975年, 68–89頁・同20号1976年, 109–128頁・『名古屋大学教養部・名古屋大学語学センター紀要 外国語・外国文学』21号1977年, 103–140頁・同22号1978年, 127–143頁・同23号1979年, 167–191頁.

ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』1–4. 前田敬作・今村孝・山口裕・西井武・山中知子（訳）東京：平凡社2006年（平凡社ライブラリー574, 578, 582, 592）.

ルードルフ・フォン・エムス『善人ゲールハルト―王侯・騎士たち・市民たち』平尾浩三（訳・編）東京：慶應義塾大学出版会2005年.

『ローマ人物語－ゲスタ・ローマノールム』永野藤夫（訳）東京：東峰書房1996年.

2. 研究文献

Bleumer, Hartmut: Rezension zu: Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. In: Historische Zeitschrift 293 (2011), S. 439–445.

Brunner, Horst (Hrsg.) : Studien zur ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Band 1. Wiesbaden: Reichert 1998 (Wissensliteratur im Mittelalter 29).

Gärtner, Kurt (1985): Überlieferungstypen mittelhochdeutscher Weltchroniken. In: Geschichtsbewußtsein in der deutschen Literatur des Mittelalters. Tübinger Colloquium 1983. Hrsg. von Christoph Gerhardt/Nigel F. Palmer/Burghart Wachinger. Tübingen: Niemeyer, S. 110–118.

Gärtner, Kurt (2013): Zu den Editionen der Weltchronik Heinrichs von München. In: Sprache und Kultur in der Geschichte. Beiträge des Festkolloquiums zum 75. Geburtstag von Rudolf Bentzinger. Hrsg. von Antje Wittstock/Martin Schubert. Erfurt: Verlag der Akademie gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt (Akademie gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt. Sonderschriften 44), S. 71–83.

Gerdes, Udo: 'Gesta Romanorum'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 3. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1981, Sp. 25–34.

Gerhardt, Christoph: 'Historienbibeln'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 4. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1983, Sp. 67–75.

Gichtel, Paul: Die Weltchronik Heinrichs von München in der Runkelsteiner Handschrift des Heinz Sentlingers. München: Beck 1937 (Schriftenreihe zur bayerischen Landesgeschichte 28).

Grundmann, Herbert: Geschichtsschreibung im Mittelalter. Gattungen – Epochen – Eigenart. 4. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck 1987 (Kleine Vandenhoeck-Reihe 1209).

Hahn, Reinhard: Rezension zu: Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. In: Zeitschrift für Germanistik 19 (2009), S. 646–649.

Hamm, Marlies: Johannes von Freiburg. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 4. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1983, Sp. 605–611.

Handbuch Chroniken des Mittelalters. Hrsg. von Gerhard Wolf/Norbert H. Ott. Berlin/Boston: de Gruyter 2016.

Haug, Walter: Einleitung. In: Runkelstein, die Wandmalereien des Sommerhauses von Walter Haug/Joachim Heinzle/Dietrich Huschenbett/Norbert H. Ott. Wiesbaden: Reichert 1982, S. 9–14.

Heinzle, Joachim: Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Beginn der Neuzeit. Band II/2. Wandlungen und Neuansätze im 13. Jahrhundert. 2., durchgesehene Auflage. Tübingen: Niemeyer 1994.

Herweg, Mathias: Erzählen unter Wahrheitsgarantie – Deutsche Weltchroniken des 13. Jahrhunderts. In: Handbuch Chroniken des Mittelalters, S. 145–179.

Janota, Johannes: 'Ambraser Heldenbuch'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 1. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1978, Sp. 323–327.

Johanek, Peter: Bruder Berthold (von Freiburg). In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Band 1. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1978, Sp. 807–813.

Klein, Dorothea (1998a): Heinrich von München und die Tradition der gereimten deutschen Weltchronik. In: Brunner, S. 1–112.

Klein, Dorothea (1998b): Die ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Ergebnisse der Forschung. In: Brunner, S. 199–239.

Klein, Dorothea (1998c): Studien zur ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Band 3/1,2. Wiesbaden: Reichert (Wissensliteratur im Mittelalter 31/1,2).

Klein, Dorothea (2010): Rezension zu: Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 139, S. 516–519.

Klein, Klaus: Französische Mode? Dreispaltige Handschriften des deutschen Mittelalters. In: Scrinium Berolinense. Tilo Brandis zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Peter Jörg Becker/Eva Bliembach/Holger Nickel/Renate Schipke/Giuliano Staccioli. Wiesbaden: Reichert 2000 (Beiträge aus der Staatsbibliothek zu Berlin. Preußischer Kulturbesitz 10), S. 180–201.

Knapp, Fritz Peter: Die Literatur des Spätmittelalters in den Ländern Österreich, Steiermark, Kärnten, Salzburg und Tirol von 1273 bis 1439. 1. Halbband: Die Literatur in der Zeit der frühen Habsburger bis zum Tod Albrechts II. 1358. Graz: Akademische Druck- und Verlagsanstalt 1999.

Kornrumpf, Gisela (1984): König Artus und das Gralsgeschlecht in der Weltchronik Heinrichs von München. In: Wolfram-Studien 8, S. 178–198.

Kornrumpf, Gisela (1988): Die 'Weltchronik' Heinrichs von München. Zu Überlieferung und Wirkung. In: Festschrift für Ingo Reiffenstein zum 60. Geburtstag. Hrsg. von Peter K. Stein/Andreas Weiss/Gerold Hayer. Göppingen: Kümmerle (GAG 478), S. 493–509.

Kornrumpf, Gisela (1992): Sentlinger, Heinz. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 8. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter, Sp. 1102–1105.

Lienert, Elisabeth (1990): Die Überlieferung von Konrads von Würzburg 'Trojanerkrieg'. In: Die deutsche Trojaliteratur des Mittelalters und der Frühen Neuzeit. Materialien und Untersuchungen. Hrsg. von Horst Brunner. Wiesbaden: Reichert (Wissensliteratur im Mittelalter 3), S. 325–406.

Lienert, Elisabeth (2016): Rezension zu: Konrad von Würzburg 'Trojanerkrieg' und die anonyme Fortsetzung. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 145, S. 546–550.

Menhardt, Hermann: Zur Weltchronik-Literatur. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 61 (1937), S. 402–462.

Müller, Stephan: Anfänge deutschsprachiger Chronistik im 11. und 12. Jahrhundert. In: Handbuch Chroniken des Mittelalters, S. 129–143.

Ohly, Ernst Friedrich: Sage und Legende in der Kaiserchronik. Untersuchungen über Quellen und Aufbau der Dichtung. Münster: Aschendorff 1940. Nachdruck Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1968.

Ott, Norbert H. (1981): Heinrich von München. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon.

2. Auflage. Band 3. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter, Sp. 827–837.
Ott, Norbert H. (1984): Chronistik, Geschichtsepik, Historische Dichtung. In: Epische Stoffe des Mittelalters. Hrsg. von Volker Mertens/Ulrich Müller. Stuttgart: Kröner (Kröners Taschenausgabe 483), S. 182–204.
Ott, Norbert H. (2000): Höfische Literatur in Text und Bild: Der literarische Horizont der Vintler. In: Schloss Runkelstein, S. 311–330.
Ott, Norbert H. (2010): "Sentlinger, Heinz". In: Neue Deutsche Bibliographie 24, S. 265f. URL: https://www.deutsche-biographie.de/gnd103130357.html#ndbcontent (2017年11月 7 日確認).
Ott, Norbert H. (2016): Kompilation und Offene Form – Die Weltchronik Heinrichs von München. In: Handbuch Chroniken des Mittelalters, S. 181–196.
Quak, Arend: Rezension zu: Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. In: Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik 66 (2010), S. 292f.
Rettelbach, Johannes (1998): Studien zur ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. Band 2/1,2. Wiesbaden: Reichert (Wissensliteratur im Mittelalter 30/1,2).
Rettelbach, Johannes (2004): 'Erweiterte Christherre-Chronik'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 11. Hrsg. von Burghart Wachinger. Berlin/New York: de Gruyter, Sp. 420–423.
Richert, Hans-Georg: 'Passional'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 7. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1989, Sp. 332–340.
Schirok, Bernd: Die Handschriften und die Entwicklung des Textes ('Parzival'). In: Wolfram von Eschenbach. Ein Handbuch. Hrsg. von Joachim Heinzle. Band I: Autor, Werk, Wirkung. Berlin/Boston: de Gruyter 2011, S. 308–334.
Schloss Runkelstein. Die Bilderburg. Hrsg. von der Stadt Bozen unter Mitwirkung des Südtiroler Kulturinstitutes. Bozen: Athesia 2000.
Schneider, Karin: Paläographie und Handschriftenkunde für Germanisten. Eine Einführung. 3., durchgesehene Auflage. Berlin/Boston: de Gruyter 2014 (SKGGDB 8).
Spielberger, Andrea: Die Überlieferung der ›Weltchronik‹ Heinrichs von München. In: Brunner, S. 113–198.
Walliczek, Wolfgang: Rudolf von Ems. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 8. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York: de Gruyter 1992, Sp. 322–345.
Weck, Helmut: Die ›Rechtssumme‹ Bruder Bertholds. Eine deutsche abecedarische Bearbeitung der »Summa Confessorum« des Johannes von Freiburg. Die handschriftliche Überlieferung. Tübingen: Niemeyer 1982 (Texte und Textgeschichte 6).
Wetzel, René (2000): Quis dicet originis annos? Die Runkelsteiner Vintler – Konstruktion einer adligen Identität. In: Schloss Runkelstein, S. 291–310.
Wetzel, René (2002): Runkelsteiner Kaiserreihe und Runkelsteiner ›Weltchronik‹-Handschrift im Trialog von Bild, Text und Kontext. In: Literatur und Wandmalerei I. Erscheinungsformen höfischer Kultur und ihre Träger im Mittelalter. Freiburger Colloquium 1998. Hrsg. von Eckart Conrad Lutz/Johanna Thali/René Wetzel. Tübingen: Niemeyer, S. 405–433.
Wolf, Jürgen: Rezension zu: Studien zur 'Weltchronik' Heinrichs von München. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 130 (2001). S. 474–479.
岡崎勝世『聖書vs.世界史』東京：講談社1996年（講談社現代新書1321）.
四反田想（1993）「ルードルフ・フォン・エムス『世界年代記』翻訳（独文・和文）及び注釈（1,1）」『言語文化論集』14-2号, 111–125頁.
四反田想（1997）「ドイツ中世世界年代記の異類像―その類型的イメージの分析―」『広島大学文学部紀要』57号, 172–188頁.
鈴木桂子「中世ドイツの世界年代記写本挿絵における物語る手段としての画枠について」『人文研紀要』49号 2003年, 269–297頁.
津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(三)東京：岩波書店1977年(岩波文庫青140-3)(初出1917年).

寺田龍男（2005）「軍記物語と英雄叙事詩(2)―J. ブムケによる「不確定テクスト」（'der unfeste Text'）の概念を中心に―」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』49号, 89–107頁.
寺田龍男（2016）「『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ―主人公の「祖先の系譜」について―」『独語独文学研究年報』42号, 1–23頁.
寺田龍男（2017）「『ヴィルギナール』研究の歴史・現状・課題―ブレーメン版の刊行に寄せて―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』129号, 115–134頁.
平尾浩三（1967）「Kaiserchronikに関して（一）―解説と試訳―」『中央大学文学部紀要』46号, 137–157頁.
平尾浩三（1969）「Kaiserchronikに関して（二）―Crescentia試訳―」『中央大学文学部紀要』54号, 1–10頁.
平尾浩三（1999）「ルードルフ・フォン・エムス『善人ゲールハルト』をめぐって―革新と伝統―」『藝文研究』76号, 346–363頁.
山本潤「中世ドイツ文学に見るローマ観:『皇帝年代記』および『ディートリヒの逃亡』を題材に」『西洋中世研究』7号2015年, 97–117頁.

【謝辞】

本研究はJSPS科研費15K02399および平成29年度北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院補助金の助成を受けたものである。

（2017年11月７日提出、12月11日受理）

«Zusammenfassung»

Die ‘Weltchronik’ Heinrichs von München —Forschungsstand und Aufgaben—

Tatsuo Terada

Mangels genügender beweiskräftiger Quellen bzw. Dokumente sind die Verhältnisse handschriftlicher Überlieferung der vormodernen Literatur nirgends auf der Welt aufgeklärt. Auf die altjapanische Heldendichtung ‘Gunki monogatari’, die wegen ihrer starken Historizität oft als *war chronicle* (Kriegschronik) definiert wird, trifft das auch zu. In dieser Hinsicht wäre es hilfreich, wenn sich die Forschungsergebnisse der entsprechenden Genres aus verschiedenen Kulturkreisen aufeinander anwenden ließen. Den Ausgangspunkt bilden dabei die Ansichten des japanischen Historikers Sokichi Tsuda (1873–1961), der die Grundstruktur der Werke der altjapanischen *war chronicles* untersuchte und folgende Eigenschaften hervorhob:

1. Die von Handschrift zu Handschrift unterschiedliche Konstruktion liegt an der lockeren Konsequenz verschiedener Erzählstücke bzw. Episoden, die sich daher leicht umsetzen, austauschen, ergänzen, wegnehmen und sprachlich verfeinern lassen. Der Rahmen jedes einzelnen Werkes war von vorneherein nicht als zwingend vorgegeben.
2. Die formelhafte Redewendung und das schablonenhafte Erzählstück legen die schlichte schöpferische Kraft des oder der Dichtenden nahe. (Das Interesse von Dichter und Publikum lag weniger auf der Originalität als vielmehr auf der Kunstfertigkeit der Neugestaltung.)

Die Merkmale, die sich aus Tsudas Beobachtung über die japanischen Kriegschroniken ergaben, finden sich – wenigstens teilweise – auch in der deutschen Chronik-Literatur des Mittelalters. Von besonderem Interesse ist in diesem Zusammenhang die ‘Weltchronik’ Heinrichs von München (um 1370/80), bei der jede Handschrift anders strukturiert ist. Diese Chronik ist nicht nur als Kompilation aus recht unterschiedlichen Quellen bekannt, sondern bereits ihre Vorlagen waren oft kompiliert. Damit liegt eine immer noch schwer zu lösende Frage zu den Handschriftenverhältnissen vor uns, obwohl die Forscher und/oder die Forschungsteams wie Paul Gichtel, Gisela Kornrumpf, Kurt Gärtner und seine Kollegen, Norbert H. Ott und die Würzburger Projektgruppe sich der Analyse dieser Chronik gewidmet und

sie entscheidend vorangebracht haben.

Heinrichs Weltchronik, dessen Autorname nur in einigen Handschriften der späteren Fassung vorkommt und daher als Chiffre anzusehen ist, ist uns Auslandsgermanisten so gut wie fremd. Aber die in der Forschungsgeschichte bislang erbrachten Ergebnisse sind so vielfältig, dass sie den Japanologen viele Anregungen bringen werden. Aus diesem Grund werden in der vorliegenden Studie Forschungsstand und Aufgaben der 'Weltchronik' Heinrichs von München besprochen.

1. Die Schwierigkeit bei der Arbeit zu dieser Chronik liegt vor allem darin, dass jede Vollhandschrift etwa 30000 bis 100000 Verse umfasst und dass dadurch eine vorlagengetreue Edition schwer zu erarbeiten ist.
2. Heinrichs Weltchronik hat einen festen Platz in der Tradition der deutschsprachigen Weltchroniken wie 'Kaiserchronik', 'Sächsische Weltchronik', Rudolfs von Ems 'Weltchronik', 'Weltchronik' des Jans von Wien und die 'Erweiterte Christherre-Chronik', aus denen sie schöpft.
3. Dass Heinz Sentlinger 1394 und 1399 (im Auftrag von Niklaus Vintler und seinem Neffen Leopold) zwei Handschriften dieser Chronik mit völlig unterschiedlichem Inhalt abgefasst hat, dient als Nachweis, dass jeder Schreiber über eine gewisse Gestaltungsfreiheit verfügte.
4. Drei Paradebeispiele (1. Prolog, 2. Christi Geburt mit der Vorlage von Bruder Philipps 'Marienleben' und 3. die versifizierte Geschichte der prosaischen 'Sächsischen Weltchronik' über Marc Aurel und Lucius Aurelius Verus – alle in der Ausgabe von Shaw/Fournier/Gärtner (Hrsg.): Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. Berlin 2008) zeigen die Vorgehensweise der Bearbeitenden.

Die Kompliziertheit handschriftlicher Überlieferung mit der ebenso schwierigen Geschichte der Vorlagen soll den Philologen mit einem kulturell anderen Hintergrund ein erstmaliges Gesamtbild der 'Weltchronik' Heinrichs von München vermitteln.

Wünschenswert wäre zudem, zwei Sachlagen aufzuklären bzw. zu vereinfachen: Man wüsste zum einen gerne, wie viele Verse jede (Voll-)Handschrift von Heinrichs Weltchronik u n g e f ä h r umfasst. Mit diesen Daten würde man nicht nur den Umfang, sondern auch viele weitere Informationen erhalten, die das Werk und seine Umgebung vielfältig beleuchten werden. Zum anderen macht die Vereinheitlichung der Angabe der Handschriften (etwa 'Wo1' oder 'H1' für die Wolfenbütteler Handschrift, Cod. Guelf. 1.5.2 Aug. 2°) es nachfolgenden Forschergenerationen leichter, auf die Arbeit mit dieser Chronik einzugehen, zumal nicht immer zu erwarten ist, dass ihnen die gesamte Forschungsliteratur zur Verfügung steht.